

KYONNYU YOMATA TOUBATSU DEN

PRESENTED BY
サーチライト

巨乳妖魔討伐伝
—斬魔の〈刀〉を鍛えるサキュバスたち—
正義の剣士へ誘惑調教

KYONNYU YOMATA TOUBATSU DEN

巨乳妖魔討伐伝

斬魔の〈刀〉を鍛えるサキュバスたち

正義の剣士へ誘惑調教♡

目次

序	妖斬りの剣士	……	P3
一	若き『主人公』	……	
二	悪夢の遭遇——品定め	……	
三	試練——味見	……	
四	試練——尋問・看破	……	
五	理由	……	
六	■ ■ ——〈鍛錬〉	……	
七	記憶	……	
八	〈鍛錬〉——搾精	……	
跋	第三戦	……	

序| 妖斬りの剣士

とある地方都市。変哲のない雑居ビルの裏路地は、夜なお茹だる熱を孕んでいた。

空はきらびやかなネオンで見えず、街の営みは黒く浮き上がった影だけに映っている。

「……は、まさか既に潜んでいたとはな——」

居並ぶ雑居ビルの屋上に、一人の男が立っていた。若いサラリーマンにしか見えないが、冴えないソレではない。

半袖のシャツに覆われた胸板は鍛えられ、経歴上では文系一直線だが、それは職業上の仮の姿、真なる任務は夜の帳の内にある。

微かに焼けた肌は抜けた印象を漂わせていて、こんな闇に居るような人間ではない。眼鏡の隅で、隣のビルの屋上を見やる。常に冷静沈着な事を評される彼の額には、暑さとは違う汗を流していた。

彼が見やる闇は、嗤うように歪んだ。

「——あら、嫌だわ。妖魔とは何時如何なる闇からも犯し入る……そう習わなかったの？ 妖斬りの剣士サマ？」

それは妖艶な声だった。闇が人の形を取る。

ゾワリと広がった甘く気怠い空気に、剣士は油断なく身構えた。

現れたのは、エキゾチカルな美貌を深紅の和服で押し包んだ美女だった。

本邦の美女とは違う白く伸びやかな肉体。豊かに波打つ赤い髪が夜風に輝き、余裕と自身に満ちた艶笑を湛えていた。切れ目だが、左目が赤い髪に隠れている。肉感漂う唇は好色さを感じさせ、微かに指先が光っている事が常人ではない事を告げている。

鷹のような端正な美貌はサディステイックな笑みに歪められ、その肉体は人には叶わぬ瑞々しく張ったまろみを帯びていた。

なかんずくその乳房の大きさは厳しい鍛錬を積んだ彼ですら目を奪われそうになり、和服の胸元は今にも乳首が零れそうな程露出し、歩くたびに揺れていた。

匂いたつような肢体。強力な妖魔である事は間違いない。脳に染み入ってくる声はそれ自体が誘いの響きと化している。

彼はそれを振り払い、そしてその素振りも見せずに、はつきりと口を開いた。

「大丈夫だ。妖魔に心配される程妖斬りの教えは腑抜けては

いないからな」

言葉と共に掲げた右手に、闇を裂くようなまばゆい光——
顕れたのは、一振りの日本刀だった。まっすぐの刃を持つ質
実な一振りで、浅く張った先反りの刀身は彼自身を現してい
るようだ。

鈍らずに厳しく磨き上げられた剣はそれ自体が光であるか
のように輝き、事実陽の光を込めた輝きである。怪異を切り裂
く、人が手にする唯一の武器。

「ふふ。それなら良かったわ。せつかく見つかってあげたのだ
から、あっさり決まったら張り合いがないものね」

「挑発には乗らないさ——〈袂刀〉！」

彼は中空の刀を両手で握りしめ、余裕を湛える影とにらみ
合う。その刀が唯一の武器ならば、彼はまたその刀を操る唯一
の剣士である。

しかし——影から顕れた妖女は、それを見てなお微笑んで
いた。

「挑発？ 剣士たるもの希望と現実を混ぜてはいけないわ？
妖斬隊、来栖成哉クン？」

「っ……お前、どこから情報を……」

自らの名前を言い当てられ、剣士——来栖成哉の目が見開

かれる。

微かな動揺を感じ取った妖魔が愉しげに唇を歪める。

「……ふふ。らしくない混乱が見受けられますね。妖斬隊第十
五地区長、来栖成哉様」

「っ?!」

その瞬間、後ろから聞こえた艶美な声に、彼の鼓動が跳ねあ
がった。

振り返ると、そこにはもう一人ビルに似合わぬ「和服美女」
が居た。

美しい浅青の髪を持ち、柔和に微笑んでいる。アイドル的な
美貌と言えば良いのだろうか、通った目鼻と垂れた瞳が可愛
らしく映る。

しかし、まろみを帯びた尻からは狐の尻尾が生えていた。ク
スリと微笑むその顔には人の耳はなく、頭から縦に伸びた獣
耳がある。俗にいう妖狐の一族なのだろう。

この妖魔もまた、女の色香を匂い立たせていた。特に視線を
下ろせば……

成哉は、ごくりと唾を飲んだ。

髪と同じく浅青の着物は、特に胸が際どく露出してる。白い
巨乳はI字の谷間を作って今にも零れそうだ。スリットが付

いた脚も肉感的なまろみを帯びていて、妖魔が何のために存在するかを思い起こさせてくる。絶世の美貌を、惜しげもなく晒した姿。

「答えはお分かりでしょう？ 迎えるべき美しい世界に気づき、私たちに協力してくださる妖斬り様がいらっしゃる以外にありませんわ」

成哉は呼吸を微かに乱していた。自分の予測を超えた自体が起きている――

全く気付かなかった。しかし今やむせ返るような甘い匂いに身体中が包まれていて、悟らざるを得なかった。

間違いない。この妖魔たちは極めて、極めて強力だ。

その妖魔たちから完全な挟撃を仕掛けられたのだ。一対一ならばまだ、しかし今は――

「もお、素敵ね。悟ってしまった結末の前に、そんな狂おしい表情を浮かべるなんて」

「……余裕だな。そんな事では足元を掬われるぞ」

「ふふ。成哉様はとても優秀でいらっしゃるのですね。その通りですよ？ もし成哉様が勝利を得ようとするならば、私たちの足を掬う事に全力を注ぐべきですから」

「……！」

言葉の矢をしたたかに打ち返され狼狽した直後、包囲網がジリジリと狭まってくる。

先手を取るためにはどうすればいい？ この局面から、どうすれば——！

(怜雄、弘……)

追いつめられる妖斬りによぎったのは部下たちの姿。いや、長きに渡り着いてきてくれた弟たちと言ってもいい存在——

「っ——！」

そうだ。強いからどうしたというんだ。俺たち妖斬りは全力を尽くし、必ず妖魔に勝つんだから。俺はやる。必ず皆の元に帰る……！

その夜。街の隅の闇で三つの影が交錯した。

*

妖魔。この国にそう呼ばれる魔物が顕れてから何世紀経ったのか——

サキユバス、淫魔とも呼ばれるソレは、男の精を吸い魔を操る化生だ。妖艶な美女の姿をして人の世に溶け込んでいて、魅入られた男は精を吸われて殺されるか、廃人となる。

時に愚かしいと呼ばれる決断がなされる背後には、常に妖魔が居た。

　　といって、人間も手をこまねいたばかりではない。かつての貴人たちは人ならざる者を狩るため、様々な方法を試みたのだ。原始的な祈り、神仏、密教、シャーマニズム。

　　くどい回り道の果てにたどり着いたのは、刀に魔を祓う力を込め、視覚・聴覚・物理の三面を現世から断つ事、つまりは類感呪術の逆回しである。人の瞳に映った偽りを斬る事により根源を断つ御業だ。磨き上げられた刀と曇りなき人の決意を要し、言わば神仙と決別する事により魔を祓う事を選んだ。〈妖祓刀〉と言われる兵器の誕生である。

　　彼らを斬るために本邦が備えたのが妖斬りの剣士、妖斬隊。侍から分派し男子のみで組織されるオカルト部隊であった。

　　人知れず戦い続ける彼らの声は聞こえず、姿は見えない。組織されてから多くの剣士が妖魔に敗れ、陰惨な最期を迎える事になった。だがそれでも、妖魔の標的である彼らにしか妖魔を倒せぬという皮肉を鋼の意志と決意で乗り越え、戦い続けてきた。

　　毎夜、妖斬りは日の当たらぬ場所で艶やかなる美女たちと死闘を繰り返していたのである――

*

……ピチャ。ピチャピチャピチャ——

人知れず行われた交錯、妖魔と妖斬の剣士の戦いの後。

三つの「闇」は雑居ビルの空きテナントにその場所を移していた。
いた。

成哉の視界には、夜に浮かぶネオン。どこか冷静な目で見つめたのはいつぶりか……

曇りなき剣士の決意と艶美なる闇たちの戦いの結末——

「——良かったわ。顔に傷がつかなくて。好みの顔だったのよねえ……」

「くっ……!!」

じつと夜景を眺めていた成哉の顔が、屈辱にゆがんだ。

(すまない、二人とも……)

——それは妖斬りの無念を残し、むせ返る色香を放つ巨乳妖女たちの勝利へと終わっていた。

妖斬りの第十五地区地区長、来栖成哉は、その顔を赤髪の妖魔にそっと撫でられていた。艶めかしい舌に顎を嘗められ、首筋を撫でまわされる。

彼は、今や身にまとう全てを剥かれていた。薄暗い部屋の四隅から伸びてきた粘着性の糸により宙づりにされ、部屋の中で魔性の妖女たちの「戦利品」と化していたのである。

両手は万歳、脚は柔軟の許す限り横に割られて大開脚。男とて恥じるべき秘所はあられもなく大の字だ。

彼の身体のうちこちには傷が残り、繰り広げた戦いのすさまじさを想起させる。

だが対照的に彼を撫でまわす巨乳妖魔の艶やかな肢体にはかすり傷一つなく、激闘は短時間で決着がついたことを思わせた。

じっと前を見て無抵抗のまま宙づりになっているのは、せめてもの「尊厳」だった。

(この強さは……くそっ……!)

なんとしてでも、この危急を伝えなければ。例え一パーセントでも。そしてそれは成哉の生存より優先される事柄であり、最悪死を持って伝えられれば御の字である。

(もし俺が失敗すれば……)

若き地区長の脳裏によぎったのは惨状。多くの仲間が倒れ、行方不明になり、悲劇がダース単位に量産された夜。彼や弟たちが妖斬りへの決意を強くした時。

アレを……あの【災厄の夜】を繰り返してはならないのだ。

「ふふ。アイラ。傷が少ないのは私の配慮があつての事ですよ」
だが、その思いはすぐに掻き消されてしまう。

後ろから淑やかな声がして、腋の間から艶やかな両手が伸びてくる。指先は両の乳首を摘み、クリクリと揉んできた。

「っ……!」

「どうしました？ 痛い思いをしたら、この後がつまらない
ですものね？」

戦利品扱いされる己に、奥歯が悲鳴を上げる。背中から、艶
美な妖狐が囁いてくる。

「ダメよ。まだ早いわカザネ」

「だって、アイラが先にお手付きを始めたんじゃない
か。もう……」

「まあねえ。でもそれは、先に地区長サマに見つかってあげた
ご褒美じゃない」

「っ？」

余裕の会話に、地区長の心臓が強く打ってしまう。あれは……
撒かれた餌だった？

「もう、どうしたのよ？ 地区長サマ？」

アイラは齒噛みしかけた成哉に笑い、舌を乳首に伸ばして

くる。

伸びた、ねっとりとした舌だった。

……ピチャ、ピチャピチャピチャ——

「っ……っ……」

妖斬りは顔をしかめた。それだけでなく、肩も震わせてしま
う。

屈辱のさなかだというのに、あり得ない感覚が乳首から湧
き上がりかける。成哉は息を長く吐いて、それを追い払った。

「あら、大丈夫ですか成哉様？ 先ほどもおっしゃった通り、
まだ始まっていませんよ？」

「……はっ、何がだ。妖斬りを舐めてもらったら困る」

「ふふ、それなら愉しみですわ」

優しい気な笑みに、動揺を悟られないようにして目を閉じる。

(……何か手を考えないと、クソツ……！)

俺は妖斬りだ。鍛錬を積んできた。決して諦めないと誓った。
快楽に耐える鍛錬もひたすら積んだのだ。折れぬ決意を、刀
の鋭さを鈍らせるな。

「……それで。これからどうするつもりだ」

努めて冷静な声で、彼は発した。生存確率を一パーセントで
も高めなければならぬ。

「まあ、そう焦らないでくださいませ。まずは自己紹介をさせてくださいな」

狐の妖魔が前に来て、楚々とした動作で頭を下げた。獣耳が合わせて揺れる。

「妖魔カザネと申します。末席ですが冠位も頂いておりますわ。以後、お見知りおきくださいね」

「冠……くっ」

優しい声だった。だが、それは彼を震撼させるのに十分だった。

妖魔の中でも選りすぐりの存在にだけ与えられる、いわば妖魔たちの長である。

「もう。優しいのねカザネは。仕方ないから見習ってあげる――良いかしら。私はアイラ・ローザ。カザネと同じ冠位持ちよ。きちんと覚えておくのよ。地区長サマ？」

アイラは微笑みながら成哉を見てきた。楚々とした妖魔とサデイスティックな笑みを浮かべた妖魔。

「……心遣い感謝する」

微かにだが、声が震えていた。俺の戦勘は鈍っても間違えてもいなかっただようだ。

稀に見る強力な敵を前に、彼は冷静さを失わないよう努め

た。

「俺を監禁した所で、どうせ定時連絡で異変は悟られる。さつさと殺した方が良いと思うがな」

「あら。成哉様の方からご提案いただけるとは嬉しいですね。連絡は何日後なんですか？」

「さあ。明日かもしれないし、明後日かもしれない。今日って可能性も捨てきれない」

「んもお、おバカさんね。三日後でしょう？ それまでは地区長サマの生死は誰にもわからないじゃない」

「……死体が明日出ようが、三日後出ようが変わらないさ」
バレている。部下の裏切りは明白だ。

忠節を誓った隊士の中に裏切り者が居るのだ。一体誰が：

…

「成哉様はあの十三地区の生き残りですよね？」

「っ?! 貴様! まさか……」

いたずらっぽくウインクしたカザネの言葉は、成哉の目の色を変えさせるのに十分だった。

「あの時は惜しかったですわ……あと少しだったのに、皆の統率が取れませんでした」

この妖魔は【災厄の夜】を知っている——妖魔にとってあの

悲劇は悦びを貪った夜であり、同時にあと一步で宿願成就に届かなかった夜である。

「あの時は失敗しちゃったけれど、今回は地区長サマが導いてくれるわよね？」

アイラが首を傾げて見つめてくるが、返す言葉もなかった。ここは本部にも近い地区。そのような場所で【災厄の夜】が繰り返される、いや、成功されてしまえば……！

絶対に避けなければならぬ。それだけは。

「……なら、俺を狙ったのは失敗だ。俺が死ねば一気に明るみになる。妖斬隊にとっては屈辱だが、失態が分かった方がずっと……」

成哉は言葉を切った。目の前の妖魔たちがクスクスと笑いだしたからだ。

「な、何がおかしいっ！」

思わず叫んでいた。汗が額を滴っている。

今まで感じた事のない焦り、混乱が剣士に忍び込んできていた。

ギリ、と歯ぎしりして妖艶な魔女たちを睨むと、カザネが自身の尻尾を撫でながら諭すように口を開く。

「もう。面白い事を仰られるんですね。三日後に成哉様から異

常・な・し・と・報・告・が・上・が・れ・ば・、・問・題・は・そ・も・そ・も・起・き・ま・せ・ん・わ・？」

「な——」

この妖魔は何を言っている。まさか——

「地区長サマ。要らない事は考えちゃだめよ。妖斬り来栖成哉は妖魔に敗北した……そうしたら、次に待っているのが何かわかるわよね？ さあ。戦いに備えなさい」

「そんなっ——あ——」

成哉の言葉は、途中で止まった。

宙づりの剣士の前で、二つの衣擦れがそつと音を立てた。

たゆんっ……

妖魔カザネとアイラに、その肢体を見せつけられた。闇夜に浮かぶ、艶めかしい肢体だった。

特にその弾むように見せつけられたおっぱいに、美しい先端に、視線が吸い寄せられてしまう。

(ああ……ど、どうしてこんなに……惹かれる?)

鍛錬は積んできたはずなのに、視線が逸らせない。むわんと色香が鼻に満ち、息が乱れてしまう。むっちりと柔らかかそうな白い巨乳に釘付けになってしまう。

「ふふ。やはり戦闘中から感じていました……成哉様は私たちのおっぱいがお好きなんですね？ 嬉しいです。私たち

も自慢ですから」

まずい。このままでは上位の妖魔の魅了にかかってしまう。

三日間、耐えられ――

「バカにするなっ……まだ、終わってはいない！」

アイラがそっと背中に回ってきた。淑やかな着物を引きずり、首筋に息を吹きかけてくる。

妖狐が正面に陣取り、おっぱいが胸板に付きそうな程に近づいてくる。後一步で、柔らかく実った果実が押し付けられてしまいそうになる。

「ダメよ苛めちゃ。妖斬りも男の子だもの」

「き、聞いているのか！ 舐めるなよ！ 俺は、俺たちは……っ？」

「ええ。ちゃーんと聞いてるわよ？ 妖斬の剣士サマの素敵
な決意♪」

「後から思い返した時に、素敵な思い出になりますからね。ふ
ふ♪」

むにゅんっ、ムチムチイ……

「あっ……！！」

捧げ物と化した剣士は、糸の悲鳴を上げていた。

巨乳妖魔たちの柔らかかなおっぱいにサンドイッチにされた

身体が、甘やかな悲鳴を上げていた。安心してしまいそうな、屈服してしまいそうな柔らかさと温かさに包まれる。

白黒させた瞳は、サディステイックな微笑に射抜かれていた。

(ただ、押し付けられただけなのにつ……)

もはや成哉は、妖魔の前に冷静さも、対等さも取り繕う事は出来なかった。

「ふふ。地区長サマ。さっきはとっても素敵な剣技だったわ。

でも、まだ鍛え方が足りないわよ？ 特に〈刀〉がナマクラ。

もっと強くなるには、素敵な剣士サマになるには……どうしたらいいかわかるかしら？」

下腹部に、妖魔のしなやかな指が張り付く。

ゆっくりと滑り降りてくる艶やかな手の感触に、鼓動が高鳴ってしまふ。

「ええ。成哉様は素敵な〈刀〉をお持ちですが、込められた〈妖^精祓^カ〉も、耐久力も及びません。どうしてか、わかりますか？」

「っ……く、んんうっ……」

尻と背中に分かれ目に、アイラの指が下りてきた。そっとそつと、鍛えられた剣士のまろみを割ってくる。前から後ろから、禁断の部位に触れようとしてくる。背中がゾクゾクと震えて

しまう。

「答えられないの？ もう。舐めないでいるのに」

「仕方ありませんわ。鍛える側として、教えて差し上げるのも役目ですよ？」

アイラが舌なめずりし、カザネがクスクスと笑う。

焦らすように、前から後ろから指が近づいてくる。

（ああ、まずい、まずいっ！ このままだと俺はっ……何か、何か手は……ああっ！）

「じゃあいいわ。特別に教えてあげる。地区長サマ、それはね……」

混乱に恐れと焦りが、そして言いようのない甘やかさが溶け込んでくる。

ああ、頭が回らない！ 俺は妖斬の剣士の地区長なんだ――！

――グチュリ

「――かっ……はっ……」

だが、成哉に舞い降りてきたのは起死回生の一手ではなく、艶やかな妖女の魔手だった。

カザネの指がペニスを握りしめ、アイラの指がアナルを押し揉んでいた。

天井を仰ぐ。襲い掛かった甘やかな快感に、口を半開きにしてしまう。

「妖斬りが持つ本当の〈刀〉を……ふふ、このカチンコチンのオチンチンを、私たち妖魔に鍛えられる事よ？」

割り開かれた股間の真ん中で、成哉のペニスには既に狂おしい程に勃起していた。

「よ、妖魔が鍛え……あっ?!」

陰のうを揉まれ、言葉が途切れる。

「良く感謝なさい？ 私とカザネで妖斬り、来栖成哉の〈刀〉。しっかり鍛え直してア・ゲ・ル」

揉まれながらの言葉に、歯が震えそうになってしまう。上位の妖魔の魅力に、飲み込まれかけている。

それを見抜かれたのか、前から「怖がらないでくださいませ」と声がかかってきた。

「改めて自己紹介しますね。私の名前は妖魔カザネ。そして彼女は妖魔アイラ。私たちは冠位の妖魔の中でも……妖斬りの剣士様たちの〈鍛錬〉を専らとしております♪」

「た……たん、れん……?」

妖魔たちの中で、敵であるはずの妖斬剣士の〈鍛錬〉の専門家？ それはつまり、それは……ああ!

冷静さが評判だった成哉の顔が、ぐにゃりと崩れた。

「あら、オチンポがビクついたわよ？ 地区長サマ、もしかして……私たちの鍛錬を受けたいと思ったのかしら？」

「ち、違うつ……そのような事思っていない！ やめろ！俺たちの刀は妖祓刀のみだ！」

「ふふ……ですがここで出会ったのも縁ですわ。僭越ですが成哉様の更なる研鑽のため、この素敵な〈刀〉、鍛えさせていただきますね？」

カザネがおっぱいを押し付けたまましゃがんでいく。狐の尻尾と無数の糸が舞うのが見える。

「まずは定時報告までの三日間、アイラと私で〈集中鍛錬〉させていただきます。その後どうするかは、成哉様にお任せしますわ」

「ま、待てっ！ そんな、妖魔の鍛錬なんて……！」

「ダ・メ・よ？ まだ終わっていないって言ったのは地区長サマじゃない？ 妖斬りの剣士サマと妖魔の死闘、第二幕の始まりよ。さあ、曇りなき決意を込めなさい？」

ほほ笑みと共に、いやらしくて白くまろぶ乳房が怒張に触れそうになる。妖魔は巨乳を両手で寄せ上げI字の谷間を作り出す。

「殺せっ！ 俺はそのような事……やめろっ……この！」

俺は人の世のためにやってきたんだ。正義を守ってきたんだ。こんな、こんな結末があつていいはずがない。落ち着け、きつと何か思いつく、何かが起きるはず——

だが、優秀な妖斬りである彼の脳裏には浮かんでしまう。妖魔たちの強さといやらしさ、そして自分の置かれている状況から導かれる、最悪の方程式を。

(何か手はっ……くそ、くそおっ……！)

汗を浮かべ、今にも谷間に飲み込まれそうになる自身のペニスを見て逃げるように腰を動かすが、妖魔の糸に縛られた身体は微かに揺れるだけだった。

「ふふ、怖がつてはいけませんったら」

妖魔の白い指にペニスを垂直に立てられる。愉しげな笑みにサンドイッチにされる。

妖魔の大きなおっぱいが、近づいてくる——！

「う、やめっ……だめっ……！」

——ズニユツ

「——おっ……」

その瞬間、妖斬りの抵抗がぴたりと止まった。

乳肉が龟头を迎え入れ、キツすぎる谷間に飲み込まれていく。妖斬りの顔を見て、カザネが優しい微笑みを浮かべた。

「おおっ……」

さらに一歩近づかれ、竿の中ほどまでむっちりとした乳肉に挟まれる。ヌプヌプと、白い乳肉の間に沈み込んでいく。

成哉の顔がトロリと溶けたのを見て、アイラがペニスを固定していた指をそっと離す。

むにゆううう……

陰のうが乳肉に当たっていた。妖斬りは尻まで硬直させてピクつかせた。

根本まで飲み込まれた時には、狂ったように勃起していたペニスが見えなくなっていた。

「……妖斬り地区長、成哉様の〈刀〉。このカザネの谷間に招待させていただきましたわ」

カザネが優しげに目を細めて笑う。谷間の中のペニスが震えているのを感じながら、そっと上を見上げた。

「さ、成哉様。初めての鍛錬ですが……」

「……お……お……お……」

「カザネ。とっても嬉しいそうよ」

涎を垂らして言葉にならない「戦利品」の代わりに、アイラが愉しげに答えた。

「嬉しいですわ。特に術を使う必要は……ありませんか」

四肢をきつく固定され大開脚。そのままペニスを飲み込まれた妖斬りは、初めての快感に溶かされていた。

妖斬りの地区長ともなれば、快樂への鍛錬は当然積んでい
る。平の剣士より余程――

(あっ……ああ……!!)

だが妖魔の谷間の中は、快樂の園だった。乳肉はムチムチで
柔らかく、その癖みっちりと搾るように挟みつぶしてくる。ス
べらかで気持ち良くて、精を吐き出させる事に特化した柔ら
かな凶器そのもの――

「それでは〈鍛錬〉を始めます。初めは悔しくて苦しいかもし
れませんが……ふふ、すぐに病みつきにしてあげますから
ね？」

快樂に全く対処出来ない妖斬りに艶美な妖女からの処刑宣
告が響き、乳房が引かれた。

ズニユリ。

「お……あ、ひっ……」

ペニスが搾られるようにズリあげられ、カウパーが零れた。

亀頭まで引き抜いた所で、再び前へ。敏感なカリ裏がおっぱいにめくられてしまう。

根本まで柔らかくて暖かい乳肉に舐められ、おっぱいで股間を抱き締められてしまう。

開脚した足指がピクピク震えだしていた。再び根元から引き抜かれ、成哉は涎を垂らしながら天井を見上げた。

ズニユツ……むにゆうう……ズニユウツ……むにゆうう……

…

「おっ……あぁっ……」

顎がガクガクと震え出す。宙づりにされた身体が、許される限りに震えて揺れる。

豊かな乳房が、たわみながらペニスを往復していく。その柔らかさを見せつけみっちり包み込み、柔らかく、そして苦しい程に扱いてくる。

「ふふ。気持ち良いですね？ 任務なんか、忘れてしまっそうでしょう？」

ゆっくりと乳房を操りながら、妖狐が微笑んでくる。

（わ、忘れてっ……うあ、お、俺え……！）

その笑みに言い返す事も出来ず、妖斬りはおっぱいが往復するたびに脚をビクつかせて、その責めがどれだけ自身に効

いているのか、宿敵に教えてしまう。

戦いに敗れ、戦利品として宙づりにされ、男としても妖斬りとしても急所の防壁を完璧に解かれ——なすすべなく妖魔のおっぱいで痛恨の一撃を繰り返し施される現実に、精神が崩れていく。

「アイラ。お願いします」

何度かゆっくりと往復した後、ガクガクと顔を震わせる成哉を見上げながらカザネが笑った。

「わかったわ。地区長サマ、安心なさい。すぐに自分の本当の価値に気づかせてあげる」

背中にピタリと寄り添う妖魔が囁き、アイラの指先が谷間から解放された竿に伸びてきた。

「…………おあつ…………おおつ…………!!」

妖魔の容赦のない追い打ちに、妖斬りは股間を見ながら唇を震わせた。

怒張しきった竿をゆっくりと撫で上げられる。裏筋を柔らかく扱きあげられる。数往復してから笑うと、しっかりと握りしめて血管に添うように扱き上げてきた。

さらに引きつった袋を、五指がねちっこく揉まれてしまう。アイラの指捌きは、柔らかくて予測が出来なかった。

(ああっ、耐えろ、耐え……)

必死に首を振り、パイズリから手コキの快感へ対応しようと気を持ち直す。

「カザネ」

「はい」

だが、悪魔みたいなタイミングで、アイラの手が離れた。

ズニユツ！

「おうっっ！」

拘束された男の舌がピンと伸びた。

手で思い切り寄せ上げられた谷間に、根本まで招待される。乳肉と竿が、苦しいくらいズリ合ってしまった。

己自身を包み込まれ、再びのおっぱいの快感に涎を零してしまう。

なんとか顔に力を込め直そうとして、

「おおっ……!!？」

後ろから抱きしめられ、むっちりとしたおっぱいを押し付けられた。

妖魔の巨乳は、押し付けられるだけで忍耐力が溶かされる甘さだった。

さらに乳首を弄られ、耳を長い舌でゾワリと舐め上げられ

る。

亀頭まで解放されると、今度はアイラの手コキ。

毎回タイミングをずらして、リズムカルなカザネのポーズ
リ。

(くそおっ……ああ……こいつらあっ……！)

我先にと精を貪る妖魔とは思えない程、息が合ってる――

「っ……！ おひいつ？！ お、ああっ……おおっ、あああ
っ！」

妖斬りの嬌声が、誰にも届かない闇にこだました。

地区長の脚が矛盾した震えを見せる。足指を震わせたりガクつかせたり、張り詰めて溶けていく。どこを我慢すればいいのかすらわからない。

妖魔の巨乳がペニスを弄んでくる。手で閉じられた乳肉の感触は狂おしい快樂そのもので、どこまでも搾られるのに果てしなく柔らかい。

引き抜かれるタイミングで裏から合わせるようにアイラに袋を揉まれ、竿を扱かれる。

乳首を弄ばれ、背中に押し付けられた柔らかかなおっぱいと舌使いに全身が震えた所で、再びペニスを巨乳で搾られる。



「ほおら頑張ってる？ 曇りなき決意はどうしたの？」

「っ……………！」

そうだ。俺は妖斬りの地区長——

「まあ。お声を我慢ですか？」

「……………」

「ふふ、可愛いじゃない……………♪」

カザネとアイラの侮蔑しきった愉し気な笑みと言葉に、妖斬りは必死に歯を食いしばった。汗を浮かべた顔を苦悶にゆがめ、髪の毛の先まで震わせる。

だが——カザネがダイナミックに乳房を操ってくると、それまでだった。

「お、おあっ!？」

割り開かれた股間で屹立するペニスが、カザネのおっぱいにみっちり締め上げられる。乳首と腰がキスして、陰のうが乳房と当たる。

「あらあら、見て? 地区長サマのオチンチン、カザネのおっぱいに引き抜かれちゃいそうよ……?」

「あ、ああ……んんっ!」

(こんな、光景……!)

怒張するペニスが乳房に搾られるのを見せつけられるのは、大きなダメージだった。豊満な乳房にサンドイッチにされる度、男の〈刀〉が腫れ上がっていくようだ。

そして水音を立て乳房に打ち付けられる陰のうに、裏から指が伸びてくる。

「っ——!」

たまらず天を仰ぎ、無機質なコンクリと見つめ合った。

パイズリの狭間を縫い塞ぐように、アイラの指が陰のうを揉んで、竿を扱ってくる。

おっぱいをしっかりと押し付けて、抱き締めてくる。

カザネが亀頭のみを残してペニスを露出させると、十指を伸ばして竿を這いまわり、引きつる陰のうを揉んでくる。

ペニスを解きほぐすような柔らかさに、首を振る事も出来なくなる。

「……お、おおっ！ お、おああっ……おひい！」

「あらまあ、鳴いちゃったわね」

結局、嬌声の我慢は出来なかった。ペニスを溶かしてくるような妖魔の指先に、勝てなかった。

「もう、早いですよ成哉様」

「仕方ないわよ。地区長サマだって男の子だもの……ね？ 成哉クン？」

柔らかい指に包まれたペニスが震える様をカザネに笑われてしまう。慈しむような声音でアイラに耳を舐められる。

（気を保つんだっ……お、俺は……俺は妖斬りのお……！）

赤らんだ顔が、愉しげな笑みに震える。悔しさが背筋を駆け抜けた。

「ふふ……」

そんな成哉の決意を、艶やかな二つの笑みが見下ろしていた。

ズニユツ……グチュツ、ムニユツ……グチュツ、ズチユツ……

……！

「おお……おはあっ……おおっ……あはあっ……！」

それからしばらく、三つの闇が潜むビルの一室に、粘ついた音と肉を打つ音が響き渡り続けた。

そこは死闘の第二幕の舞台。

だが、妖斬りの地区長の吐息はあまりに熱っぽく、妖魔たちの顔は艶美に過ぎていて、そして愉しげだった。

「ねえ……」

「ええ」

それは妖斬りの地区長の股間を舞台に、前から後ろから妖魔の手管が披露される死闘。

「……おあっ？　そ、そこっ……お、おあっ！」

艶やかな指とむっちりと張ったおっぱいが交互に妖斬りのペニスを包み、挟み、扱き、搾り、揉みほぐしてくる。

妖斬りの地区長は、さながら鉄を鍛える相槌を食らっていた。

（こんなっ、どうして……こんなあっ……！）

妖魔たちは言葉もない。それなのに笑みと目くばせだけでこちらの行動を、息遣いを、なけなしの忍耐を見抜かれてしまい、先回りで陥落させられてしまう。

「ふふ」

「まあ……はい」

一瞬たりとも休めない。鍛えてきた我慢を發揮する尻尾すら掴ませてくれない。

「やめっ、ああっ、あっ……！ お、おひい……っ！」

カザネのおっぱいが往復するたび、アイラの指が竿で蠢くたび、だらしなない嬌声を上げ、よがり狂っていく。

あまりに息のあった調教に、成哉は妖魔の「手馴れ」をペニスで感じてしまっていた。

ああ、この妖魔たちが妖斬^魔りを鍛錬^調する専門家なのは、本当だ――

「ふふ、もっと開きなさい」

アイラの愉しげな声で糸がきつく締まり、ほとんど水平になるまで股間を開かれた。引きつった陰のうが、取り残されたように垂れさがる。

それを見て、赤髪の妖魔は舌なめずりした。

「……ほおら。地区長サマ？ こういうの、好きでしょう？」

そこにアイラの指が股下から滑り込んできて、陰のうをグニユリグニユリと揉まれる。

それに合わせるみたいに、カザネのパイズリを施された。

ズニユツ、ズニユツ、グニユグニユグニユツ……ズチユツ……

……！

妖魔の艶やかで白い指とむっちりと実ったおっぱいが、同時にペニスに襲い掛かる。

伸びやかな指にぶら下がったソレをねっとり揉まれ、指と当たるくらいに乳房が剛直を包み込み、挟みつぶしてくる。

「くひいつ……お、おおこれえ……す、すごい……」

妖斬りの素直すぎる告白に、妖魔たちの艶やかな笑い声が響く。

発掘された大好物の一撃に、妖斬りは涎をダラリと零していた。

思わず感嘆が漏れている事にすら、妖斬りは気づかなかつた。

どこをどう我慢しているのかわからない。何に耐えているのかも、わからない――

正義の妖斬りは魔の獲物に墮とされていく。艶やかな微笑たちに見つめられながら、玉の汗を浮かべて熱くなる。

彼を成していた刀の決意が消えていき、妖魔の好む〈刀〉だけが磨かれていく。

「ふふ、大分臭みが抜けてきたわね」

「ええ。そろそろ頃合いですわ」

それはいやらしい巨乳妖魔たちの経験と実績に基づいた、

残酷な知見だった。

「成哉様？ わかりますか？ 成哉様が鍛えてきた妖を祓う力が今、タマタマに溜まってきているのが。もうすぐ、私たち妖魔に捧げてしまう事が……わかりますか？」

「はあっ……はあっ……んあっ、あはあっ……！」

「ちよっと、成哉様？ もうお返事が出来なくなってしまいましたか？」

妖斬りは胸板を拍動させるだけだった。汗を浮かべた青髪の妖狐が頬を膨らませているのを見るばかりだった。

精がそこまで昇ってきている。今にも漏れ落ちてしまいそうで、声が出せない。

妖斬りの地区長として鳴らした彼は、その妖斬り鍛錬の専門家たちの手によって、一本の〈刀〉になりかけていた。

「カザネ。私たち二人で鍛えてあげてるんですもの。そんな辛い事言っちゃだめよ？」

「まあ、残念……でもいいですよ。今日は成哉様の記念すべき日ですものね？ 真なる刀に気づく日ですから」

ゆつくりと乳房を揺すられ、限界まで敏感になっていたペニスに乳肉で搾られる。

(耐え……)

「頑張ったわね。アタシが褒めてあげる。好きなだけ出しなさい」

「ふああ……」

両手が胸板に回ってくる。強く抱き締められ、赤い髪から匂う香りに鼻腔が満たされてしまう。背中の柔らかな感触が、耐えようとする意志ごと溶かしてくる。

カザネが尻尾を揺らしながら腰を揺らし、ペニスを溺れさせていく。

リズムカルな水音が響き、張り詰めたペニスに残酷なトドメが施される。

ズニユツ、ズニユツ、ズニユウツ！

「んはあつ、あはあつ——！ おつ、おおつ……！」

（ああ、俺っ……だ、ダメっ……こんな……っ……！）

ペニスがむっちりとした乳肉に磨かれていく。妖斬りの思考は白く光り、屈辱も何もかも消え失せて、ただ快樂のみに支配される。

水音と肉の音だけ響く一瞬が部屋に満ちた。

「あ、ああっ……イグツ！ い、イッグウ……ッ！」

ガクガクと腰を震わせながら、妖斬りのペニスが妖魔のおっぱいの中で爆ぜた。

妖魔二体に抱きしめられた体中が小刻みに震え、極上の谷間の中へと精を注ぎ込んでいく。

「ふふ、出しちゃったわね？」

「あ、ああああっ————！」

これ以上ない程、妖魔の顔が喜悦に歪む。

成哉はクスクスと笑う声が首筋から聞こえ、必死に射精を止めようとリキんだ。

「もう、無駄ですよ？」

ほほ笑みと共に残酷な追い打ちがかけられる。

カザネはみっちり谷間を寄せ上げたまま、魅惑的に括れた腰を左右に振ってきた。

勃起しきったペニスが無理やりよじられ、右に左にねじられ乳肉を滑らされる。



「オオツ……あぁっ、あひいー！」

狂おしい苦痛が、たちまち快樂に変わっていく。

おっぱいに亀頭だけ挟まれ、乳肉の狭間で竿が何度もビクつきまくる。

(ああ、なにこれえ……止まらなあ……！)

妖斬りは首を振りたくって快樂から逃れようとしたが、ペニスはしっかりと囚われて白い谷間から逃げる事は出来なかった。

やがて谷間から染み出すように白濁が溢れ、濃厚な精の匂いを漂わす。

艶やかな美女と肉感的な美女が鼻を微かに揺らし、唇を淫

靡にゆがめる。

「ふふ、やはり素敵ですわ……美味しいです」

「ええ……久しぶりの上物じゃない……さすが地区長サマ」

快楽によがる妖斬りをしっかりと捕えながら、妖魔は冷静な論評をその精に下していた。

「褒めてあげるわよ、剣士サマ。貴方は……」

「……あ、ああっ！ がはあっ……アアアッ！」

「もう、聞いていませんわよ？」

「カザネがおっぱいを止めないからじゃない。全く……」

そう笑いながらも、アイラは射精を続ける妖斬りの乳首を弄る。しっかりと腰を抱き締めて、獲物の逃げ場を完全に断つ。

「ありがとうございます、アイラ……」

カザネは微笑みながら乳房を操り、ぬめった光を帯びるペニスをおもずり上げてくる。ダイナミックにズリあげて、蛇口の壊れたペニスを追い詰める。

「おはあっ、んはあ……あ、あひい——！」

妖斬りの剣士は、誰にも届かない嬌声を上げ続けた。

*

「くはああ……ああ……」

長い射精を終えた妖斬りの顔は溶け落ち、剣士の面影だけが漂っていた。

拘束していた糸は緩み、尻を掲げるだらしない恰好で床に倒れ伏す。

（ああ、俺……）

人生で味わった事のない、長く濃厚な射精だった。搾り取られたという形容にふさわしく、息も視界も定まらない。

だが奇妙な事に……貪られ、貪りつくしたという危険な満足感に満ち満ちていた。

ぼんやりとした視界に伸びた細い脚が四本見える。脚は絡み合い、水を吸うような音が響いた。

「もう。私が搾った物ですわ。欲しいならアイラ自身でどうぞ」「ん……いいじゃない。お腹空いてたのよ」

「仕方ありませんね。今度は私が手伝って差し上げますから」（ああ、逃げないと……）

ぼんやりとした意識で、成哉はそれだけを思った。可能性はそこにしかない。この調教を三日間も受けたら。この二人にみっちり『集中鍛錬』を施されてしまったら、俺は。

曇りなき決意を誓った妖斬りだけど、地区長だけど、でもこ

の妖魔たちの前では……

手足にムチ打ち、必死に出口に進んでいく。芋虫のように這う。無様すぎる格好をさらしながら、成哉は妖斬りとして行動した。

「ちよつとお、どこに行くのかしら？」

「くあっ……！」

でも、ダメだった。両手に糸を巻き付かれ、一本にまとめられて引き上げられる。ドアまで一步の所から、妖艶な美女たちの前に吊り上げられる。

観る影もなく萎れた彼を、艶やかな笑いが二つ出迎えた。

「悦びなさい剣士さま。鍛錬はこれからよ？ それにまだアタシは一回もやってないわ」

「ええ。後三日間もありますわ。まだ私たちの鍛錬を拒まれるのは早いですよ。たっぷり味わってから決めてくださいな？」

「あ、ああ……」

絶望的な宣告だった。

アイラは長い舌で首筋を舐め、そこからシユルシユルと糸を伸ばしてくる。ねっとりとして湿った糸が乳首に絡みつき、縄のように身体を縛っていく。

「しっかり〈鍛錬〉してあげますからね。今度は……ふふ、妖

し仕込みの技も使って差し上げます」

ふさりとした尻尾が伸び、咲き乱れる草花のように股間を取り包んでくる。

「うあ……た、頼むつ。もう、殺してくれ。そんな、ダメだ……」

俺が耐えきれなかったら。この地区の妖斬りは……弘は、怜雄は。ああ——！

——人知れず戦い続ける彼らの声は聞こえず、姿は見えない。負ければ死か、鍛え上げた精を最悪の形で発揮する日々が待っている。組織されてから多くの隊士が妖魔に敗れ、陰惨な結末を迎える事になった。だがそれでも、妖魔の標的である彼らにしか妖魔を倒せぬという皮肉を鋼の意志と決意で乗り越え、戦い続けてきた。

日夜、艶やかなる魔女たちと死闘を繰り返していたのだ――

「——んっほおおおっ！　だ、ダメ！　ダメダメッ！　そこダメすぎっ……おおイグッ！　イッグウウウウウ！」

その日からみっちり三日間。一人の妖斬りが剥き身の刀身と化し、巨乳妖魔たちの極上の〈鍛錬〉を受け続けていたが――嬌声の上がる闇に気づく者はいなかった。

（体験版はここまでとなります）